タイ国における蚕糸業

前タイ国養蚕開発技術協力プロジェクト団長　大村清之助

目　次

はじめに
タイシルク
タイの蚕糸業の性格
タイに於ける生糸の生産高
タイの蚕糸業の歴史
東南アジアの蚕糸業の中に於けるタイの地位
タイ国蚕糸業開発プロジェクトの目的と現状
タイに於ける機械製糸業について
タイの蚕糸業の将来性
タイの蚕糸業開発と日本の蚕糸業の関係

はじめに

私は国際協力事業団の委嘱をうけて，タイの蚕糸業開発に対する日本の技術援助について，両国間の契約の衝に当り，且つ現場の仕事の責任を負うことになり，昭和44年2月に調査と契約のためにタイに出かけ1ケ月足らずで用務を終えて帰国し，その年の9月1日に他の専門家とともに3ケ年の予定で現地に派遣されたのです。協力期間が3ケ年延長されたので，その分だけ滞在を延長したのですが，協力期間が更に3ケ年延長れさたのを機会に辞任して今年4月15日に帰国したのです。5年7ケ月をタイ国で過したので，その間に見聞し，体験したタイの蚕糸業について御紹介します。

タイシルク

タイの蚕糸業の歴史は，後で述べるように非常に古く，タイ人は昔から男女とも晴着用として絹を愛用しつづけてきています。それは，巾90cm位，長さ180cm位の布を腰から下にまとうもので，タイ語ではパツムと言っていますが，ビルマやマレーでサロンと言われているものと同じです。戦前にはこの両国に対して，タイの絹のサロンが輸出されていたのです。それは玉糸織に似ていますが，柄（がら）がおおようで，色が明るく，他の国の絹の持たない美しさをもっています。戦時中タイに派遣されてアメリカの軍関係に勤務していたジム・トンプソンという人が，そこに眼をつけて，戦後アメリカに宣伝しそれが効を奏して今では世界にその名声を博しています。主として婦人服地として欧米に輸出されたり，タイを訪れる外国人がみやげとして第一に求めるものとなっています。これは世に出てまだ歴史が浅いので大した量ではありませんが，特有の生産物の少ないタイ国にとっては大切な産物に育ちつつあります。今では数多くの機業者が生れて，中には織り方や染め方に劣悪なものがあって，たまたまタイシルクの名声を傷つけるものもありますが，傾向としては少しづつ増産しつつあるようです。

このタイシルクのよこ糸には，タイの農民が古来の手法でつくった粗い，節の多い生糸を用い，たて糸には，日本や韓国等から輸入した生糸——タイには撚糸工場がないので，専ら撚糸を輸入している——を用いています。

タイの蚕糸業は，このタイシルクを生産するためにあるものです。

タイの蚕糸業の性格

日本をはじめとする先進の蚕糸国では，桑苗つくり，栽桑養蚕，蚕種製造，製糸，機織，染色の各工程は完全に分業になっていますが，タイではこのすべてが，養蚕家の手によって行なわれるのが本来の姿です。自分の手でサロンを織るのが，養蚕家の目的ですからこのような一貫作業をすることになるわけです。それが近世になると，糸とりの段階で作業を終え，生糸を販売する農家が現われはじめ，同時に機織を業とする者も現われてきたのです。現在では販売される生糸の量は，農家が自家消費するものよりも多いのではないかと思われます。しかし旧来の養蚕を行っている農民で，繭を売るものはありません。従って製糸業は，あとでのべる近代養蚕の場合は別として，まだ成立していないのです。

タイでは，養蚕は東北地方でだけ行なわれています。例外的に北タイと，西タイでそれぞれ1ケ村だけ養蚕をしている農民が数十戸混っているところがありますが，これは東北地方から移住した人達です。

タイの養蚕で一番目につくことはその規模の極めて小さいことです。タイの農家は母系中心的ですが，子供は結婚すると別居するので大家族制ではないのです。養蚕，糸とり，機織りはすべて婦女子の仕事ですが，働き手の女子は，2～3人しか居ないので，この3通りの作業を大規模に行うことはできないのです。桑園は1アール位の小さいものが珍らしくなく，10アールもあれば大桑園の部に入ります。しかも無肥料ですから，一年中生育はしていても，収量は極めて低いのです。タイの農家の住宅は2メートル位の高床式ですが，その高床の居間の一隅に竹の蚕架をおき直径70～80cmの竹製の丸い蚕箔をならべて蚕を飼うのです。一戸当りの飼育量は5～6箔というところが平均のようで，20箔も飼っているのは例外中の例外とも云うべき大養蚕家で，そんなのを私は2戸しか見たことはありません。貧弱な桑から摘み葉で収穫するのも厄介であるし，あとでのべる寄生蠅を防ぎながら給桑する作業も手のかかるものであるし，蛾が出る前に糸をとる仕事にも限度があるというような事情では，規模を大きくすることはむづかしいのです。従って1回の収繭量は平均2～3kgのもので，1年に5回位飼って10～20kg位の繭をとることになりましょうか。そりよりとれる生糸は，毛羽も糸にするけれども，糸目は10%に達しないから，年内の生糸の生産高は1～2kg位のものでしょう。これで織ったサロンは1枚150g前後ですから，一反当り10枚前後となりましょう。それは自家用としては多すぎるから，余分は親類や知人にわけたり，売ったりすることになります。

このようなやり方だから，一戸当りの生産をふやすことはむづかしいし，かつ新たに養蚕をはじめることもむづかしいので，生産高はそんなに増えないと思われます。規模が小さいから，養蚕に失敗しても損失は目立たないし，成功したからと言って，目立つほどの利益があるわけではない。そこには技術を改良する必要性もないし意欲も生じないから，幾世紀もの間，進歩らしい進歩も発展もしないで来ているのです。

繭から生糸をとる方法は，庭先きに七輪か，石をつんだ簡単なかまどをつくるかして，その上に繰糸用の小さくて深い土鍋又はアルミの鍋をのせ，その中に適当に繭を投げ入れては煮ながら，

50個内外の繭から1本の生糸をひきずり出してゆくのです。1つの繭から1本の単糸を出すのではなく，繭の表層からは索緒のときと同じように，キビソに相当するものが加ってきます。従って出来た生糸は節の多い，せんどの太いものです。品質は3つに分けられています。適宜に繭を補給し乍らひいたのは2等，表層だけをひいたのは3等，一旦表層だけから3等の糸をひいた残りの中層の繭だけを集めてひいたものは1等となります。肉眼で容易に区別できます。1等はたて糸に供することができるので，農家が自分で機を織るためにつくるようです。値段は1等が300〜350バーツ（1バーツは約15円）であれば，2等は150〜200バーツ，3等は100バーツ前後というような差がついています。

サロンの織り方は，日本の農家が明治時代に使っていた機に比べると，大分見劣りのする粗末なもので，巾90㎝位の大巾に織ります。すべて先染で，婦人用はよこ紺で，男子用は大がらのたてよこ縞です。一軒の家で，幾種類かのがらを織ることができますから，幾百年に亘る母子相伝の技術によるものと思われます。但しバンコクその他の機業家が織っているものは，たてよこ同じ色で淡く染めた無地が大部分です。それをあとで捺染するのです。土産の生糸は原料が黄繭であり，色の濃さも雑ぱくであり，よごれもあるので，純白の生地は織れないからでしょう。

タイの蚕糸業の第2の特徴は，多化性品種の蚕をつかっていることです。多化性は産卵後10日前後で卵が孵化するので，冷蔵も人工孵化もしないで，1年に7〜8世代をくり返すのです。簡単に種がとれるので，農家は蚕種を自家製造します。これでは蚕種製造業が成り立たないから品種改良は行われていないのです。養蚕試験場がいくつかの品種を選んだと云っていますが，それは地域によって，繭の形とか色に多少のちがいのあるものが生じたのを採集したもののようで，実用上すぐれたものを選んだというほどのものではないようです。仮りに蚕業試験場でよいものを育成したとしても，それを農家に配布すると，自家採種するから半年もすると改良前のものに戻るでしょう。試験場で毎回，すべての農家に蚕種を配布するなどのことは，仕事量が莫大になるから，不可能です。従って多化性の蚕の品種改良は実際的には実行不可能ということになります。多化性の繭は小さくて，薄く，繭層歩合は10%ぐらい，毛羽が多くてボカ繭のような形質があるから，機械製糸の原料には向かないものです。それで，多化性を使っている間は，機械製糸を導入することはできないとみてよいでしょう。

自家採種をすることによる弊害がも一つあります。それは微粒子病の予防が出来ないことです。タイの養蚕農家には微粒子病のない家はないと思われます。蚕種が自家製なので，掃立量は甚だ多く，掃立量と収繭量の比では，日本では2万粒：30kgですが，タイでは10〜20万粒：30kgくらいではないかと思われます。莫大な蚕種の無駄があるわけです。この無駄は，稚蚕中に弱い蚕を大量に淘汰することになるので，微粒子病に侵された蚕の大部分をすてることになり，全滅をまぬがれるのには役立っているとは思われますが，もし蚕種を購入しているのであれば，こういう方法は成立しないと思われます。

多化性には長所もあります。それは高温多湿，不良桑，給桑不足等の悪い飼育環境に対して2化性に比べると抵抗力が強いこと，及びカビ病にも2化性より強いことです。こういう長所があるので，タイに於けるような良好とは言えない環境の中で，不注意な，原始的な飼い方をしても養蚕がつづけられているものと思われます。

タイの養蚕で，今一つ目につくのは多化性蚕蛆による被害の大きいことです。この蠅はアジア大陸に広く分布すると言われていますが，タイの場合は，平均3割位は害をうけているように見受けられます。5割以上の被害を見ることは珍らしくありません。この蠅は蚕の皮膚に直接卵を

産みつけるので，これが蚕箔に侵入するのを防ぐために，蚕箔を厚い大きな綿布でしっかりと包んでいますが，給桑のときに蠅がとんできては産卵しようとするので，片手でそれを追いながら作業をするが，どんなに注意しても，毎回のことなので，相当の蚕がやられることになるわけです。

以上が，タイの蚕糸業の素顔ですが，この中で多化性を使用していることと，自家製糸を目的として養蚕をしているので規模が小さいことの二つは，タイの養蚕，製糸の技術水準を数百年来停滞させている大欠陥であります。タイ国の蚕糸業を開発しようとするならば，何をおいてもこの２つの旧習を破らねばならないのです。

タイに於ける生糸の生産高

タイでは統計が正確ではないので，生糸の生産高はよくわかりません。タイシルクは，よこ糸にタイの土産の生糸をあて，たて糸には日本や韓国その他から輸入したものをあてています。よこ糸はたて糸の２倍半ぐらい使われるということです。輸入生糸はどの位あるのか，はっきりしませんが，多くて2,000俵ぐらいと思われます。するとそれに対応する土産の生糸は5,000俵です。その他に，タイの農村で自家製のたて糸を用いて織られる絹があります。これも統計はありませんので仮に1,000俵とみますと，合計6,000俵というのが，土産生糸の生産高になります。その信頼性は低いと思いますから1,000俵位の誤差を見込む必要がありましょう。この他近年生れた機械製糸の生糸が200～300俵あります。

タイの蚕糸業の歴史

タイ人は近年まで戸籍を持たなかったし，今日でも墓を持たないのですが，そのことと関連があるかも知れませんが，歴史に対する関心の少ない国民であると言われています。そのせいか，その歴史はそれほど古くはないのに，あまり明らかではないようです。勿論，養蚕の歴史など詳しくしらべたものはないようです。明治35年（1902年）にタイが招聘した外山亀太郎博士を団長とする養蚕開発に関する資料さえととのえられてはいないようです。

タイの古いことについては，隣国，とくに支那の極く僅かの記録によって王朝のことがうかがえるだけのようです。タイ人の祖先は紀元前に揚子江の南岸に住んでいた種属であって，それが南下して，７世紀に雲南にNonchaoという強力な国をつくり，支那より独立して東南に力を延ばし，９世紀初めにはビルマのイワラジ川のデルタ，当時支那の支配下にあった今のベトナムのトンキン，アンナンを侵略したが，９世紀の終りには支那の支配下に服し，1253年に蒙古のクビライカンに征服されて独立性を失ったのです。しかしNanchao王朝の時代には支那と戦ったり，交易したりすることによって支那の文物，技芸などを摂取しています。この王朝が亡びる前にタイ民族は，ビルマよりインドシナに亘る大河を南下しはじめており，12世紀のはじめには，今のタイ国のメナム河の上流に小さい国をいくつか形成していて，蒙古の抑圧が弱まると，ビルマのイワラジ，サルウインを下って今のシヤン族として残り，メナムを下ったものは今のタイ国民となり，メコンを下ったものはラオスや東北タイに留ったと言われています。1238年にはタイに南下していた種属の長が，当時クメール（カンボジア）の勢力下にあった中部タイのスユタイでクメール軍を破り，ここに初めて強力なタイ王朝をつくり，それが中心となりいくつかの王朝の変遷を経て今日に至っているのです。

タイ民族は棉も絹も持っていたと言われていますが，絹は南支那に住んでいた時代から持っていたものか，Nanchao時代に支那と交流して得たものかはわかっていないようです。 現在タイ

で，旧来の養蚕が行われているのは，東北地方だけです。東北以外の地方で養蚕の行われているところがあるにはありますが，すべて東北から移住した農民が行っているものです。タイでもっとも古い都市と言われている北タイのチエンマイ，チエンライ地方には養蚕はありません。

東北タイはメコン河を隔ててラオスと向い合っています。ラオスにも養蚕があってその方法は，製糸も織り方も含めてタイと全く同じです。つまり雲南から直接タイの北部に移動してきた部属は養蚕を持たないのに，ラオス人とともにメコン河を下った東北タイ人は養蚕を持っているのです。これはNanchao時代にトンキンやアンナンを征服した部族が，南支那以南で養蚕をとりこみ，ラオスと東北タイに移動したことを示すように思えます。揚子江南岸に居たころから養蚕を持って居れば，北タイにも養蚕はあって然るべきであろうからです。かつラオス，東北タイとも多化性しか持っていないことも南支那以南で養蚕をとり入れたことを示唆します。尚ラオス人とタイ人とは同じ種族であって言語も文学も非常に似ていて，タイでは50年前までは，北タイの人を北ラオ，東北タイの人を東北ラオと，多少軽べつの意を含めて呼んでいたくらいです。

以上のことから判断すると，タイの養蚕の歴史や起原は明らかではないが，相当に古いものであることは確かであると思われます。このことは，さきにも述べたように，養蚕家の主婦が，かなり複雑な先染の絹織物を織ることからも判断できると思われます。なおタイの養蚕は機織りまで含むので，その技術だけを他の地方に拡げることは極めて困難であるので東北地方に限られているものと思われます。また同じ理由で，東北地方に於ても養蚕の盛んな村はそんなに多くはありません。

東南アジアの蚕糸業の中に於けるタイの地位

東南アジアの蚕糸業の実態については，私はタイとラオスのほかは，タイに居た間に直接間接に聞いたことしか知らないから，おそらくその内容は皆さんの知見以下ではあっても以上ではないだろうと思われます。

東南アジアで昔から養蚕をやっているのは，タイ，ラオス，ベトナム，カンボジアの4国でしょう。このうちラオスの養蚕は，タイと全く同じですが，人口が少ないだけ，養蚕農家の数が少ないので絹の輸出能力はありません。桑などは，お互が自由にメコン河を舟で渡って融通しています。日本から，昭和44年以来専門家が派遣されて技術指導に当っていますが，人口が少なく稀薄で，国力も弱く，教育程度も低いので，その開発は容易ではないようです。ベトナムは南北とも，日本から専門家が行って指導していますが，どの程度見込みがあるかは私は知りません。ただベトナム人は東南アジアではもっとも有能であると云われているので，その点は強味だろうと思われます。カンボジアのことはよく知りませんが，ベトナムほどは盛でないように思われます。タイの養蚕センターに，この国の高級官史が訪ねて来て相談をうけたことがあるし，昨年よりは，国連のメコン委員会——メコン川流域にあるタイ，ラオス，ベトナム，カンボジア4ケ国の開発を目的とするもの——が，タイの養蚕センターで，カンボジア人の養蚕訓練をしてくれないかということを希望として申出ていたから養蚕開発の希望は持っていると思われます。インドネシアは，50年ほど前に，大谷光瑞氏が農園を拓いてその中に養蚕をとり入れようとされたことがあり，戦前片倉がちよっと手を下しかけたこともあってか，極く僅かの地区に養蚕をやっているところがあって，養蚕についての処女地ではなく，現に日本から技術指導チームが派遣されています。マレーシアは近年養蚕に興味を抱きはじめ，私のところに3年前に，農業大臣がタイに来訪された折に，1日をさいて見学に来て，中食を共にし乍ら話合ったことがあり，そのあと日本から調

査団を派遣していますが，それ以上は進んではいないようです。ビルマは戦後，新興国としての意気に燃えていた頃，養蚕開発を経済振興の一つの方策としてとりあげ，日本の協力を求め，日本はそれを容れて，賠償をかねて，人と機械を大々的に供与し，蚕糸大学，製糸工場等必要な設備をととのえたのですが，それが完成する前に政情が急変してすべて立ちぐされてしまったことは御承知の通りです。ヒリッピンは，今まで養蚕には全く興味を示さなかった国ですが，最近日本の商社に，養蚕開発の協力を要請して，極めて限られた地区で，養蚕を開始しつつあるという噂をききました。

以上が東南アジア諸国の蚕糸についての情報です。一見すると甚だ活発な動きのようですが，ここで留意してもらいたいことがあります。それはタイのような古くからの独立国で，行政経験の豊かな国に於ても，行政組織がまだ不完全であり，その上，行政は組織で運営されることになっているが，それは建前であって，人的なつながりで運営される向が少なくないということです。タイ以外の国は，戦後はじめて独立したもので，行政運営にはタイ以上に前時代的なところがあるのではないかと思われます。このような国では，たとえば養蚕開発についての日本に対する協力要請は，その国として蚕糸業開発の方針を確立した結果として提出された場合は稀で，関係行政部局の責任者の意向によって進められた場合が，多いのではないかというように察しられることです。蚕糸業開発という事業は，長年月に亘る確固たる計画と努力が必要なのですが，その辺のことを弁えずに安易にとり組んでいるのではないかというように思われる場合が少なくないようですからいかに日本が協力しても，東南アジアに於ける蚕糸業開発に大きな期待を持つことはできないように思われます。

さてこうした情況の中に於けるタイの蚕糸業の状況ですが，上記の他の諸国と異っているのは次の３点です。戦後政情が安定していること。戦後タイシルクの名が世に出て今ではタイの産物の１つになっていること。日本の技術協力が実を結びつつあること。従って東南アジア諸国の中にあって，蚕糸業開発についてもっとも有利な条件をそなえていると思われます。但しタイの蚕糸業の将来性は，タイ国とタイ国民の努力と意欲の如何にかかっているのであって，そのことが容易なことではないということをつけ加えておきたいと思います。

タイ国蚕糸業開発プロジェクトの目的と現状

昭和44年に発足した，タイ国に対する日本の技術協力の一つである蚕糸業開発プロジェクトの目的は，現在タイシルク用のたて糸として日本や韓国等から輸入している生糸を，タイ国で自給しようとするところにあります。それによって，片や外貨の流出を防ぎ，片や農村に新らしい養蚕を興して農民の収入をふやし併せて農村に製糸工場を導入してタイ国に極めて乏しい地方工業の芽を伸ばそうというのであります。従ってその業務の内容は，タイの東北地方に養蚕研究訓練センターと，そのサブセンターをつくり，そこで良質の生糸を生産する為に必要な栽桑，養蚕，蚕種製造，品種改良，病理，製糸等各般に亘る試験を行って，現地に適用できる栽桑，養蚕，蚕種製造，製糸の技術をつくりあげること，それらの技術についてタイの関係公務員，農民，企業関係者等を訓練すること，及び農民に対する新らしい養蚕技術の展示の中核となるパイロット養蚕村をつくるという４点であります。

これを実施するに当って，われわれが立てた基本方針は，タイの在来の蚕糸業の２大欠陥，「多化性の使用」と「自家製糸用のための養蚕」から縁を切ることでありました。それは，現在このような養蚕を行っている人達にそれを改めよというのではありません。われわれが，これから興

そうという優良生糸の生産を目的とする蚕糸業は，このような従来のものとは全く別個のものにするということです。

このように，新らしい蚕糸業を興すためには，多化性の代りに2化性を利用すること，繭は製糸工場に販売しそれによって現金収入を殖やすのであるから養蚕の規模を先進養蚕国なみに拡大すること，機械製糸を成立させることの3点を実現させねばならないのです。そのためにつくりあげねばならない技術としては次のものがありました。

第1は寄生蠅の侵入を防ぐことのできる蚕室の設計，第2はタイで普及できる2化性蚕品種の導入と育成，第3は2化性蚕種の製造と保護と人工孵化の方法，第4は条桑収穫法と条桑飼育法第5は機械製糸法です。このうち第1は別として，その他はすべて日本の現行の技術を基にして，現地に適用できるように改良すればよいのですが，温帯に於ける技術を，自然条件の全く異る熱帯に於て，しかもあまり精鋭とは言えない人に向くように改良することは容易なことではありませんでした。幸にして，上記の5点について実用技術はでき上りました。勿論改良の余地は少なくないので，今後の研究努力が大いに必要なことは言うまでもありません。

技術の訓練は順調に進みつつあり，養蚕については一期40日前後で，ただ養蚕を経験する程度のものですが，今までに受講したものは500名をこえています。

パイロット養蚕村の設置は，もっともむづかしい仕事で，たいへん苦心しましたが，僥倖にも，内務省の開拓部が乗ってきたので昭和48年に第1のパイロットが活動をはじめ，49年に第2のが，今年は第3より第6までが養蚕をはじめました。いずれも当初は30戸位で発足し，稚蚕共同飼育所をそなえています。年々，各パイロットとも30戸位づつ養蚕農家がふえる計画ですが，実さいは，10戸ぐらいづつしかふえていません。農家は蚕室を建てることになっているのに，それに必要な低利資金の融資の枠が足りないので新規加入者は希望者の一部しか認められないのが原因です。

パイロット村の繭はすべてセンターが購入しています。価格は繭層歩合17%，選除繭歩合5%を基準として1Kg 50バーツ（約750円）です。1戸の養蚕家が一期に生産する繭の量は20Kg乃至50Kgで，1年6～7回行っています。

タイに於ける機械製糸業について

タイで現在機械製糸を行っている工場が，5～6ケ所あるが，そのうちの1つは5年位前に恵南式自動繰糸機の120緒ぐらいのを入れていますが，繭が少ないので稼動率は非常に低いようです。その他はすべてタイ国製の多条機です。規模は1ケ所だけが400緒ぐらいあって増設しつつあるが，他は100緒以下の小さいものです。全体の生糸の生産高は年間200～250俵位と思われます。その品質は日本ではみられない程の低いものです。製糸業は日本に比べて繭が安いこと——多分5000掛ぐらいと思われる——，施設費が安いこと，繭の在庫期間が短いこと——平均2～3ケ月——，繰糸工女の賃金が安いこと——20バーツくらい（1バーツ＝約15円）—— 等は有利ですが，金利は大分高いようです。センターには当初多条機，座繰機，玉糸繰糸機を入れ，その他足ぶみを5台入れました。局長達は足ぶみに非常な興味を示し困りました。器械が簡単ですぐ作れること，農家でも使用できることのためです。これは品質のよいものがつくれぬこと，これでよい糸を繰るのには最高級の技術がいることなどをくり返し説明して，その普及をやめたのですが，これを持参したのは無益でした。座繰機は使用がむづかしいので，殆ど使わず，専ら多条機を使いました。しかしこれを使ってみると生糸の品質の統一がむづかしいことがわかってきまし

た。工女の仕事ぶりを常に監視し，技術をたえず指導し，繰った糸の品質を検査して技術を矯正してゆくことなどはタイでは極めてむづかしいのです。かりに教婦のような職種をつくったとしても，それが工女個々に技術上の注意をすることはむづかしいことのようです。人の前で，ある人に注意するということはタイ国では，いけないことのようです。労賃が安いから，自動繰糸機は不経済であろうと思って多条機等を入れてみたのですが，品質管理のむづかしいことがわかったので，3年前にニッサンの検定用自動繰糸機6台を入れ，今では専らそれをつかっています。それでタイで現在生産されている生糸の中では，センターのものが，せんど偏差はもっとも小さい筈です。なお玉糸繰糸機は常時使っています。

工女はよく働きます。訓練をすれば，日本人の半分の仕事はできると思われます。工場管理者や中間の幹部が技術のことに経験が浅く，智識が乏しいので，現在のところは，工女の能率は工場によっては非常に低いようです。

タイの蚕糸業の将来性

タイの旧来の蚕糸業は，既にのべた如く，織物まで，少くとも糸とりまでを含めていて複雑であるのに，規模があまりに小さくて収益の低いものですから，発展の見込みは低いと思われます。歴史が古いわりに，養蚕農家の数は少なく，養蚕の盛な村は多くはないのですが，この事実がこの普及のむづかしいことを示しています。

われわれが協力している新らしい養蚕業の将来性は，旧来のに比べると普及の可能性は高いと思われます。それは1年間にたとえば300kgの繭をとれば，15,000バーツ（約225,5000円）の現金収入になるが，これはタイの1農家の平均年間現金取得高3,000バーツ（但し3年前。今では米価が当時の倍になっているから，5,000バーツ位にはなっていると思われる）と比べると高い収入であり，かつ，それが年間5～6回に分れて入ってくるので，現金収入としては極めて好ましいので，パイロット村の農家は非常に意欲を示しています。しかし指導する側も，農家も日本人ほど行動的ではないので，タイ国全体で年内100俵も生糸を増産できれば，そのへんが限度であろうかと思われます。現在2,000俵近く購入しているのではないかと思われますが，それをすべてタイで生産するのはいつの日になるのか，大分遠い先きのことのように思われます。

ごく最近，タイとアメリカの外交関係が角ばってきましたが，これが，アメリカのタイに対するドルの低利借款に影響するかも知れません。ちょうど内務省が，パイロット養蚕の進展のために200万ドルの，15年据置き，50年償還，年利2分というまるでただのようなドル借入れを交渉中で，3月下旬には米国から第2次調査団も来て，実現の可能性が高いと言うことでしたが，これなどどうなるかわからないと思われます。

タイの蚕糸業開発と日本の蚕糸業との関係

現在生糸の生産は，世界的に過剰であって，日本の蚕糸業は外国の蚕糸業の圧迫をうけて苦しい立場にあるのですから，タイ国で蚕糸業が発展することは，日本の蚕糸業にとっては，マイナスにはなってもプラスになるものではないことは明らかでしょう。しかし世界の平和の維持が日本の存立にかかせない条件となっている今日，南北問題を緩和する一助として，世界の超特大蚕糸国の日本が，後進国の蚕糸業をひきあげることによって，その国との友好関係の増大に寄与することは，日本の蚕糸業が，日本国及び日本国民に対する貴重な奉仕とみるべきではないでしょうか。それも年間100俵ずつ位の生産のことですから，大蚕糸国の襟度として快く指導の手をの

ばしてやりたいものと思われます。

なお，タイの場合は，生糸の生産の目的をタイシルクの生産においていることを忘れてはならないと思います。タイシルクは，日本やその他の国の絹織物とちがって，手ざわりはあらく，織り方も粗雑ですが，特有の色彩とがらをもっている上に，値が安いせいもあって，気楽に着られ，絹は高価なものであって，正式の晴着にふさわしいものというふうに固苦しく考えられ，世界的に大衆の消費が減少しつつあるとき，その考え方を打破してゆくのに役立ちつつあります。この生産と消費を援助することは，世界的にみれば，絹の消費を増長することにつながりますから，日本の蚕糸業にとっては好ましい結果をもたらすものと思われます。